

資料

1. 水都大垣と水門川

昭和の初め、大垣市内で一昼夜に湧き出した水の量は約70万トン。当時の東京、大阪の水道使用量の20倍にも達していました。

大垣市は濃尾平野の扇状地に位置し、東に木曽、長良、揖斐の三大河川、西に養老山脈という立地条件に囲まれ三大河川の涵養水が集まり、大垣を中心とした扇状地の地下でぶつかり噴き上がる全国一の規模の自噴水井地帯であります。

豊富な水量やおいしい水質の地下水は「れき層」に貯水され「おいしい水の宝庫」になっています。濃尾平野の地下水分布状況によると、大垣は第一、第二、第三層からなる最も深い地下水層を形成していました。

まさしく「日本一地下水都市」であり、「水都大垣」の由来でもあります。

昭和30年代に紡績業のように多量に水を汲み上げる産業の進出やその後の都市化進展により地下水位は低下し地盤沈下が起こり、湧水地に生息した「ハリヨ」(トゲウオ科のイトヨ属の魚)も絶滅の危機の瀕していました。しかし、近年産業構造の変化により紡績工場は撤退し、自噴水は徐々に水位を上昇させ、水都大垣の復活がかなうこととなってきました。

自噴水、地下水都市としての大垣を紹介してきましたが、一方、水路、水運の町でもあります。大垣市は揖斐川、牧田川、大谷川をはじめとする14の一級河川が市内を通り、西美濃地域の資材、産物を船町湊より水門川を下り揖斐川を経て桑名から名古屋、東京、大阪へと物資を送る川湊の町として飛躍的に発展してきました。

俳聖松尾芭蕉が紀行文「奥の細道」で大垣を結びの地として「蛤のふたみに別行秋そ」と詠み多くの門人に見送られ伊勢に旅立ったことはあまりにも有名です。



明治時代、船町港は物流の一大拠点として栄え、当時珍しい外輪蒸気船が往来しました。この船町を流れるのが水門川(延長14.5km、流域面積21.0km²)であり、大垣城の外堀として掘られ、水運のための運河として利用されてきました。かつての川の玄関「船町港」は明治17年大垣駅の開業とともにかつての賑わいを失い陸の玄関「大垣駅」を中心としたまちへと移行していきました。

現代の水門川は市内を背骨の如く通り、多くの橋を擁し生活風景の川、市民のシンボルリバーとして愛され親しまれ、川沿いには約2.2kmにわたる遊歩道「四季の路」が親水施設として整備され、のどかな景観と憩いを提供してくれていますが、残念ながら環境基準ではDランクと生活排水と産業汚水に汚染されています。それどころか市民は水門川を巨大な排水路としてしか見なしていないのかもしれない。

では、新たな大垣の玄関「大垣駅」を中心としたまちの賑わいはどうでしょうか。全国の商店街と同様に空き店舗率20%と沈滞化の一途にあります。

そこに内存する問題として商店街の諸事情、例えばハード面(商店街の老朽化、駐車場問題)ソフト面(商品力の不足、後継者問題)外部面(大型ショッピングセンターの進出、大都市の商圈域の拡大)と日本の商店街の諸問題が大垣の商店街にも集積しています。

そこで、愛する大垣を未来に残したい市民の「夢」「知恵」「アイディア」でまちを元気にしたい、活性化しようという熱い思いから市民活動団体が立ち上がりました。
水と川を活かしたまちづくりを提唱し続けるのが私たちの「NPO法人まち創り」です。

2. 「NPO法人まち創り」の地域資源を活かしたまちづくり

地下水、自噴水、水門川はまちのオタカラ（お宝）です。「水」は大垣の地域資源として見直し、地域振興に、まちづくりに利用活用しようと「NPO法人まち創り」は下記の事業を展開してきました。

(1) 自噴水親水公園の作成計画

セブンスプリング計画.....七つの自噴水公園回廊作成

「大手いこ井の泉」「八幡神社大垣の湧水」「栗屋公園」

まちかどオアシス.....市民が井戸端会議のできるポケットパークの作成

「藤江 まちかどオアシス1号」

(2) 水門川的环境改善と賑わい計画

花いかだ事業.....市民に川に関心をいただいてもらう

歩いて観よう水門川クリーン作戦

1. 川底学習会
2. 川底清掃.....市民500人参加
3. エコマネーの実証実験

水門川カーヌーフエスティバル

1. 2005年FISA世界ボート選手権大会の開催
2. 水上スポーツの振興
3. 市民が川と親しみ、川を護る

ウォータークリスマス

1. 水門川沿いに130本の市民手造りのクリスマスツリーを作成し電飾する
2. ウォータークリスマスフェスティバル
チャリティーコンサート
3. Just One Nightコンサート
既存店利用のコンサート



3. 水を活かしたまちづくりと大垣の展望

都市生活の発展と向上、例えば、治水事業の発展、上下水道の完備、輸送交通形態の変化とともに現代日本人と水のかかわりが急激に希薄になってきました。まさしく水は日常生活の生活材、工業用水としての生産材化し、川は大型の都市下水道化してしまいました。



しかし、近日人々の環境問題やスローライフへの関心が高まるにつれ、水と人間生活の関係の必然性が見直されるようになりました。これまでの「産業都市大垣」のみの選択肢から生活の質の向上を伴う「生活都市大

垣」を選ぶことにより、環境と人を結びつけ人間性回復のステージを創出する新しいまちづくりのシナリオが水都大垣を復活させることとなります。そして、自ずと賑わいの界隈性も創出されることでしょう。水を活かしたまちづくりの展望においていかに水を見せ、見てもらうか、まず、水は貴重な天恵の宝物であることを市民の皆さんに認識してもらい、それらを愛し、愛着を抱くことにより新しいまちづくりへの発展と可能性を見出すことができるでしょう。

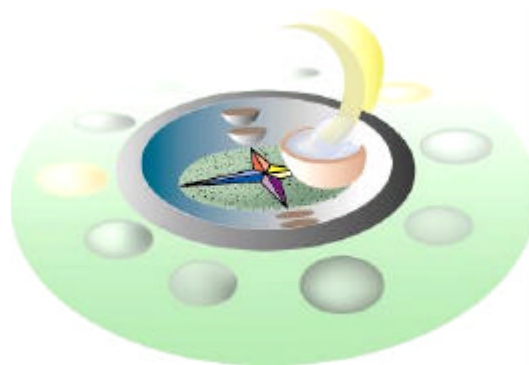
これを「NPO 法人まち創り」の戦略として提言すれば

- 1．水を点から線につなぎ、さらに面まで発展・拡充する（自噴水回廊都市）
- 2．水を活用・演出した水のビジネスの創出（ウォータービジネス）
- 3．環境・福祉・健康・観光などのソフト事業と水を組み合わせる（水のテーマパーク都市）

地域資源の活用・演出からコミュニティビジネスへ、そしてオンリーワンのまちづくりを目指すことです。



城型自噴水



月見の自噴水